研究ノート

柴さし考

高原三郎

一　榊と神事

① 古事記天安之河原（あめのやすのかわら）の神集いの条に「天香山（あめのかぐやま）の五百津真賢木（いほつまさかぎ）を根こじ（根掘り）にこじて、上枝（はつえだ）に八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉（やさかのまがたまのいほつのみすまるのたま）を取り著（つ）け、中枝（なかつえ）に八咫鏡（やたかがみ）を取り繫（か）け、下枝（したつえ）に白丹寸手（しろにぎて）青丹寸手（あおにぎて）を取り垂（し）でて……天宇受売命（あめのうずめのみこと）、天香山の天之日影を手次（たすき）に繫けて、天之真拆（あめのまさき）を鬘（かづら）と為（し）て、天香山の小竹葉（こさば）を手草（たぐさ）に結（ゆ）ひて……」とみえる。

榊は神代の昔から字の構成の如く神の木であり、蔓（かずら）、まさき、ささ（笹）なども神祭の用具として使用された。現在も南島の神祭には草や木枝の冠は、神祭の神の憑（よ）りつきの扮装に不可欠な材料である。

正月の門松は文部省唱歌の「松・竹立てて門毎に、祝う今日こそ目出たけれ。」で普及したという。年の神の降臨する依代である。緑の常盤木を庭先に立て年木とするものである。

② 三省堂―新明解国語辞典

芝―しば―野原に自生する多年草。繁殖力強く土手や庭園に植えて芝生をつくる。

柴―薪に適した雑木の小枝など。

③　本草綱目や漢法医学に見られるように、中国は古くから草根木皮の研究が進歩していた。

中国や朝鮮では柳が神祭りに多く登場している。

中国の雨乞の巡廻では、男たちは光脚（裸足）で柳条帽を被って参加する。行例の人々に家人が柳の枝で水をかける。柳は陰木で水と雨（共に陰）の類比呪術である。また柳が水（雨）神の依代（よりしろ）の意味があるとされる。

「春秋繁露」には「祈雨には水がめを設け、貯えた水に柳を挿す」とある。

朝鮮の雨乞では懸瓶があり、瓶に水を満たし、松葉や柳の枝で栓をし、軒先に逆に吊るし少し宛滴（したた）らせる。

二　手向神（たむけのかみ）考

①　大日本神名辞書「手向の神」

道路神、坂神、峠神、嶺神などとも言われる。行路の人が旅行の安全を祈って、その途次でこれらの神に弊（神に供える布や絹など）を手向けたことからの名であるという。（民間では後に正式の弊が柴や芥を供えることに変化した。）

②　臨川書店―神道大辞典（①と大同小異の点は省略）

近江国逢坂関明神の如きは、京師より東国に下る人が、まず最初に越える坂の神として、行く手の安全を祈願したので逢坂山を手向山と称し、関明神を手向の神とも唱えた。

奈良の手向山神社（東大寺の鎮守手向山八幡）のある手向山も同様の理由でつけられた地名である。

③　平凡社―神祇辞典

手向神―山路にある神・道守神（ちもりのかみ）ともいう。山嶺等で物を手向けてこの神を祀れり。嶺を称して〝タウゲ〟〝トウゲ〟というはタムケの訛（なま）れるものという。

④　佐藤三郎―諸祭神名総覧

道路交通の神として次の神々があげられている。

(1)　道之長乳歯神（ミチノナガチハノカミ）・長道磐神（ナガチハノカミ）

(2)　道俣神（チマタノカミ）

(3)　八衢比古神・八衢比売神

(4)　久那戸神

(3)(4)は災害除去、疫病予防のため道路祭・辻祭に祀られる神

(5)　道祖神〔猿田彦神〕―塞神、障神とも書き、庚申塚、庚申塔と習合。

㈢　ヒダル神考

拙著「大分の神々」で次のように解説した。

「山路を旅する者や、山中で山仕事をしている者が、急に激しい空腹感をおぼえて一歩も歩けなくなってしまうことがあるという。

こんな時には、米一粒でも口にいれるとよいとか、掌に米という字を書いて嘗（な）めるとよいという。従って狩人や樵人や山越えをする旅人は、弁当を食べる時必ず何粒か残しておいてヒダル神に襲われた時の用心にするという。

ヒダル神が現われる場所はたいてい定まっていて、峠などが多いといわれている。

ヒダル神は紀州では「ダリ神」「ダリ仏」「ダニ」等といい、肥前島原では「ダラシ」という。（岩崎美術社―民俗の事典）

奈良県十津川谷では「ダル神が憑（つ）く所あり。ダル神は、昔飢え死にした者の妄念（とりみず）が人に憑くという。ダル神に憑かれると冷汗が出て体が冷くなり、ちょっと休んでもねむりこんでしまう。

腹が減っていなくてもダル神が憑くことがある。飯を持参しても食う力が出ない。古い墓のある所に出るという。（宮本常一―秘境一四〇頁）

「志磨国の国崎……九十九峠にあるダリ仏は、行倒れを祀ったものであるが、それにとり憑かれると、だるくて動けないようになる」（瀬川清子―日間賀島・見島民俗誌八二頁）

㈣　芥神（あくたがみ）

①　柳田国男全集二十巻一三三～一三八頁には次のように解説されている。

「アクツ、アクト、アクドという地名は東日本に多い。上野国では悪途と書く。東北地方には、阿久戸、悪戸、悪土が多い阿久津、圷、悪田、安久田などとも書かれる。明津、明戸は佳字に改めた例である。

塵は陸上の細土で、芥は水中の沈澱土。芥は洪水の度に下流に搬出される沈土である。昔は塵と芥は厳重に区別して使われていた。また芥火は、海浜で流木や海草などの漂着したものを焼却する火のことである。

阿久刀神は日本書紀の穴済（アナノワタリ）柏済（カシワノワタリ）の悪神と同じく、要害の地に蟠居して交通を阻害した国神（クニツカミ）の一つであろう。アクタの地が往来に不便なのを利用して道の通行を妨げる神となり、威武を振った者を祀ったか、またはこれに対する畏敬を根拠とした信仰の痕跡である。」

②　井ノ口章次―日本の俗信一二三頁

「袖もぎさん、柴折りさんなどもわけのわからない無縁の霊がうろついている場所で、面倒な奴にとっつかまえられると厄介なので、自分の霊を奉献して服従を誓ったような顔をして無難に通り過ぎようとしたものである。」

③　梅木秀徳氏が合同新聞に発表した大分の地名一〇一回の「芥神」には「あくた神はもともと塵や芥の神ではなかったかと思われる。」と記してある。

④ 地名辞典によると「アクツ（阿久津）は段丘下の小平地のこと」である。

⑤ 大分県下の芥神の地名は次の通り。

1 耶馬渓町新耶馬渓―芥神

2 〃　戸原―悪田神（あくたじん）

3 安心院町板場―芥神

4 〃　古川―悪田神

5 姫島村中小屋―芥神

6 国東町富来浜崎―芥神

7 〃　小原赤ハゲ―芥神

8 国見町櫛来と岐部の間―アクタガミ

9 大分市竹中河原内と大野町中土師間の峠―アクタ神峠

10 挾間町赤野―芥神

11 〃　高崎―芥神

12 庄内町野畑の熊群神社参道山道の途中にある芥神（参拝者が奉納した数十本の杖が山積している。）

13 庄内町上渕より直野内山に山越する峠―芥峠

14 湯布院町中川水地鳥帽子岳―アクタ神

15 臼杵市中臼杵吉小野―芥神

16 〃　海添と津久見峠の間―芥神

17 三重町松尾―芥神（通行者が塵、芥を拾って一つでも供えると足が軽くなるといわれている。）

18　緒方町から傾山登山路―アクタガミの滝
19　緒方町冬原賀々地―芥神
20　大野町安藤―芥神
21　久住町岩井川―芥神
22　天ケ瀬町八本木―芥神（旅人が古くなったわらじや馬の沓を側の木にかけて奉納したという。）
23　大山町西大山―芥神

㈤　南島の柴差（指）祭考

①　琉球史辞典（年中行事　八月）

陰暦八月十日に小豆入りの強飯（こわめし）を神仏や火の神に供え、悪魔除けの柴（薄〝すすき〟と桑の枝を束ねたもの）を軒に挿す。これについては次の伝説がある。

「琉球国由来記―芝をさす由来」に「昔南風原の兼城村の黄金の森の近くを、安平田という百姓が牛をひいて通りかった時夕立が降ってきたので近くの墓で雨宿りをした。すると墓の中から人間の手が出て安平田の頭髪をつかんだ。安平田が驚いていると〝自分は兼城按司の一人娘であるが、眠っていた間に葬られてしまった。どうかこの事を家に知らせてくれ〟という。安平田が邸に走っていってこの事を伝えると、按司の家では親類縁者が集って娘の三日祭だといってユタ（巫女）を呼んで魂呼びをしていたところであった。皆が墓にかけつけて、桑の枝とすすきで妖気を払って娘をつれ帰り、三日祭のための赤い強飯で祝の宴を開いた。この日が八月十日であった。後に安平田は娘の聟となった。

このことを聞いて上は国王から下は庶民に至るまで、八月十日は赤飯（あかがしー）を神仏に供え、柴を軒と門に挿して悪

魔を払うようになった。

② 沖縄大百科事典―柴差・柴指（しばさし）

沖縄諸島で旧八月に行われる物忌行事。すすきや桑などを門、家・屋敷の四隅、軒、種物入れ容器や瓶の口、庭、拝所の大木の根元、田畑、井戸などに挿し、火の神や仏壇・神棚にかしちー（赤強飯）や酒肴を供えて御願（ウガン）をする。八月折目（ウユミ）、シバシチ折目、八月カシチー、シバカシチー、シバクンジなどという所もある。旧八月八日から十五日頃まで十日を中心として行われる。

昔は八月は一年のしめくくりの祭、一年中の願立と願解き、後生（ぐしよう）の正月などといって祭をした。また八重山の節（シチ）祭が年返し、年迎えと言われることから、年末、年始の行事であることが理解できる。

大宜味村喜如嘉のシバサシのオモイ（神歌）には「浮き漂っている沖縄の島を、土砂や島釘をさしこんで固定し、村落の各所に植物を植えこむ云々」と創世の様子を歌いあげている。

③ 宮城真治―古代の沖縄

陰暦八月十日、家々の四隅にすすきややぶにつけい等をさして、柴差祭を行い邪気を払う。

古くはこれが年末の行事であった。八月の満月の日から年が改まるとされていた。

㈥ 宇佐神宮の柴差神事考

(1) 大宝律令の斎戒規定

大祀―散斎一月・致斎三日　中祀―散斎三日・致斎一日　小祀―散斎なく致斎一日

散斎とは荒忌・大忌のことである。諸司は常のように執務しながら物忌みをする。次の六色の禁忌を守る。(1)弔喪　(2)問病　(3)食宍（肉）　(4)判二刑殺一　(5)決二罰罪人一　(6)為二音楽一これを侵せば罰あり。

致斎とは真忌・小忌のことで、この間は祭事のみを専心行う。

(2) 宇佐神宮の致斎（入江英親―宇佐神宮の祭と民俗）

① 二季の大祭（今は中祭）

一旬（十日）の間是を執行す。その間糟粥、朝山、半作の薬沓、秘呪、秘歌等の口伝あり。一旬満ちぬる翌の日に朝神祭あり。……

この祭は致斎・散斎の儀なれば致斎の神事という。

嵯峨天皇弘仁十四年（八二三）初執行あり。今に至て絶えず。（八幡宮本紀）

② 春祭（致祭）―酉の日から旧二月初卯の日まで七日間

冬祭（致祭）―酉の日から旧十一月初卯の日まで七日間

③ 宇佐神宮の柴差神事（入江英親―宇佐神宮の祭と民俗）

致斎入りの前日、雑仕は神山に入って大小の榊四十五本を伐採して出仕に進める。出仕は垂手（しで）をつけて、致斎札と共に雑仕に渡し、下宮二之御殿の申殿に置く。致斎札は横巾十五糎程、長さ五十五糎程の桧の板で、表面に祭の期日、裏面に奉仕神職全員の氏名が墨書され、公衆に祭の期間を告示するものである。

翌酉の日の丑の刻（午前二時）を期して祢宜（着狩衣）は出仕（着浄衣）を従え、雑仕（白丁）二人の持つ松明（たいまつの明りで下宮に参進する。申殿に置いた真榊と致祭札の前で一揖（一回礼拝）して、祓詞を三回唱え、一揖する。

丑三つの刻（丑満つともいう。丑の刻一時〝ひととき〟二時間を四分した三番目で午前二時から二時半まで）に至れば、雑仕二人の持つ松明を先頭に、出仕は致斎札をかけた大榊を持ち、祢宜と共に先ず御炊殿（みかしでん・神饌調進殿）惣門の東にある榊の木のもとに進み、出仕は致斎札をかけた大榊を立てる。立て終るを待って祢宜は一揖して次の歌を二回朗詠する。

難波都に咲くや木の花冬こもり今を春べと咲くや木の花

これは春祭の歌で、冬祭の歌は次の通り。

み山には霰（あられ）降るらしと山なるまさきのかずら色つきにけり

朗詠終れば一同一揖して、次に小椋山の鞍部即ち御炊殿惣門と上宮を下ってきた第二鳥居との中間、高倉の北に当る榊の木のもとに進む。致斎札をかけた大榊を持った出仕は前場と同様にこれを立てる。立て終るを待って一揖して祢宜は前と同様神歌を二回朗詠する。

次に大鳥居をくぐって進む参道（大馬場）と呉橋を渡って進む参道との交叉する付近、即ち大馬場筋の榊の木のもとに進み出仕は致斎札をかけた大榊を立て、祢宜は神歌を二回朗詠する。前の二場所と同様にする。

終れば祢宜は斎館に帰館する。

出仕は斎札（真榊）四十二本を雑仕に持たせ、上宮の本殿を始め各節末社に至り、社殿の向拝の柱及び門楹（えい・は柱）に結びつける。これを俗に柴刺（しばさし）と称す。

註　雑仕は雑人ともいい、神事の雑役を勤める人である。

致祭入りの夜半の松明の明かりを見た者は必ず死ぬとの信仰が現在もなお残っている。

この祭の時刻、様相は日本の古い祭の形式（深夜、早朝。静寂裡。）をよく示したもので、祇園会以後の日中、歌舞音曲を伴う絢爛豪華な祭と対称的である。

参考

岡山県赤磐郡吉井町の旧県社・式内小社の宗形神社〔宗像三女神〕の柴刺神事は十二月十五日社柴を神饌田に刺して行われる。

④　真玉町金屋丸山の貴船神社の境内祠に致斎神社〔誉田別命〕あり。明治十一年宇致斎より移転（神社明細牒）

⑤　宇佐神宮の神験薦枕

中津市薦社の三角池の真薦（まこも）を刈り、宇佐宮下宮で神験の薦枕を作る。新しい薦枕は神輿に納められて、田笛→鷹居→瀬社（せやしろ）→泉→乙咩→大根川→妻垣→小山田を巡行して本宮に奉納される。本宮の古い神験は下宮に下され、こゝで奈多宮からの御迎使に渡される。高田の若宮社→田染八幡宮→朝来弁分の祇園宮→瀬戸田の仮社→塩屋の御馬（ごば）の松で奈多宮大宮司に渡される。この一連の神向を行幸会という。奈多宮の旧験の行方ついては三説あり、①沖の御机島で竜宮へ放流②武蔵の椿宮③伊予八幡浜の大矢野神社に送るという。参考①岡山県真庭郡湯原町の八幡神社では、御神体を新薦で巻き替える神事がある。（神社名鑑）

参考②国東町大字綱井小字真薦

(七) 年中行事と植物

次に杵築市の伝統的建造物保存対策調査報告書にみえる年中行事の中から植物をとりあげてみた。（月日は旧暦）

正月六日　松飾（札・帳）の片付け

正月七日　七種（くさ）粥

正月十四日　年縄飾物下げ

正月十五日　小正月懸物花、生け改め

二月彼岸中　御墓所花立

三月二日　草餅

五月五日　端午―菖蒲（しようぶ）屋根前日四日に葺く。

註　この日菖蒲を湯に入れてわかし入浴する。

七月七日　七夕（たなばた）

註　竹に短冊（尺）をつける。

十月一日　亥の子

註　亥の子石の綱は藁縄

十二月　節分　豆撒き

十二月二十一日　松迎え（山から門松用の松を伐ってくる。）

十二月二十八日　門松立て。年縄はり。

参考　日田市の旧家草野家は多くの古い雛人形を所有することで知られているが、その格納箱の底には菖蒲を敷くということである。

仏事と植物との関連の検討が欠けているが、葬儀における花輪や献花、仏前に供える菊花・墓参での挿花等は日常多く見られるものである。

㈥ドンド焼き（左義長、三毬打、ホツケンギョウ等の別名あり）

筆者の少年時代の年中行事への参加の中で、最も強烈な印象を持つものは「ドンド焼は十四日、お粥は十五日」のドンド焼きである。村の少年組の子供達は各戸を巡回して、正月の門松・年縄・飾り物と一把宛の稲藁か麦稈を集める。幹部は竹や木の枝葉を伐ってくるが、これは一々承諾を求めずにどこを伐ってもよいと黙認された。

私の部落では部落共有の稲荷田にドンドの山を築いた。この中に必ずパチパチと音を立てて燃えるとべらの木の枝葉を沢山混入させた。子供たちはその音からこの木をパチパチの木と呼んだ。

ドンドがすむと燃え残りの黒く焦げた木をかき集め、部落の各戸に必ず配り戻した。この燃え残りの木を使って、十五日の朝お粥を炊いて食べると、年中無病息災であるといってどの家も必ず作ったものであった。

とべらについては「日本の中部南部の海岸に近く生ずる常緑灌木で高さ一～三米、よく分枝して円い樹冠を作る。茎葉には

一種の臭気があり特に根、皮に著しい。昔除夜にこの木の枝を扉（とびら）に挾んで悪魔を防ぐまじないとした故に〝とびら→とべら〟という。」とある。県南地方でも疾病や悪鬼を攘（はら）うものとして、鰯の頭と共に門等に付着させる慣習が残っている。

小正月の火祭は全国的に広く行われているが、次に代表的なトンド行事を二例紹介する。

神奈川県鎌倉市の鶴ケ岡八幡宮では一月十五日に左義長神事あり。

宮城県仙台市八幡町の大崎八幡社では、同日松焚（とんど）祭神事あり。

(九)　木の神紋・家紋　（丹羽基二―神紋）

皇室―十六菊紋と五三の桐

徳川家―葵の紋（三つ葉葵）

栃木県唐沢神社〔藤原秀郷〕。春日神社―下り藤紋

天満宮―梅鉢紋と松紋　稲荷社―稲紋　熱田神宮―桐竹紋　伊勢神宮―花菱紋　鎌倉八幡宮。浅間神社―桜紋

西宮（戒〝えびす〟宮）―柏紋　大阪阿部野神社―笹竜胆（ささりんどう）　豊後大友家―杏葉（ぎようよう）紋

東照宮―抱き茗荷（みようが）　日吉大社西本宮―牡丹　甲斐源氏―武田菱　奈良大神（おおみわ）神社―三本杉紋

京都御霊神社―桔梗紋　奈良竜田神社・静岡秋葉神社―紅葉紋　鳥取賀露神社〔大山祇神〕―桃紋　福岡水天宮―椿紋

福岡白山神社―抱き柊（ひいらぎ）

参考　宇佐神宮―巴紋（神紋では巴紋が最も多い。）

(十)　木の神（佐藤三郎―諸祭神名総覧）

① 句句廼智神（紀）久々能智神（記）

註　「くく」は茎、「ち」は男神。

② 素戔嗚尊―┬―大屋毘古命（五十猛〝いたける〟命）
　　└―大屋津姫命
　　└―抓（つま）津姫命

紀の一書に「素神が鬚髯（ひげ）を抜いて散らすと杉となり、胸毛を抜いて散らすと桧となり、尻の毛は柀（まき、槇）となり、眉の毛は櫲樟（くす・楠）となった。楠等で船を作り桧は神殿宮殿の用材となった。」とある。

素神と子神三柱は韓地（からくに）に渡ったが、帰国して木種（こだね）神・植林有功（いさおし）の神となった。木祖神ともいう。

参考　紀伊は木を嘉字二字としたものである。

㈡　神木

(1)ここでは境内の古木を指定した御神木でなく、各神社の象徴木である。天満宮―梅　弥彦神―椎　松尾神社―槻　熊野宮―梛（なぎ）註　願い事を書いてこの木に結ぶと願いが叶うといわれている。

伊勢神宮・稲荷社―杉　日吉社―榊・桂　熱田神宮―公孫樹（銀杏・いちょう）　住吉・北野天神―松　愛宕神―樒（しきみ）　賀茂神―槻　伊勢朝熊山―桜　忍岡稲荷―榎　高野山―槇（まき）笹山権現―椋　月読神―櫟（くぬぎ）大峯山―ひば（あすなろ）

参考　①　南島の御嶽の神木は蒲葵（「びろう」方言で「くば」「あじまさ」で、神の降臨昇天する梯子（はしご）と考えられ、神の招代（おぎしろ）となるとされた。またその葉で神扇を作った。吉野裕子は、男根の象徴と考えている。

②　中国の神祠前によくみられる木は柏、桂、桐、柳（揚、やなぎ）、槐（えんじゅ）等である。

㈢　霊験や効能の伝承ある木や草

① 蘩（しろよもぎ）と蘋（ひん・浮草）

(イ) 日田市庄手・亀山の日の隅神社の亀山東麓参道にある安政三年（一八五六）建立の大鳥居は、日田・久留米の商人の寄進者二十人の名が記される貴重な鳥居であるが、その銘文には試経の「采蘩祁々」の句が含まれている。中国では古来春になると、人々は待ちかねていたように大勢の人が野や川に出て、春の芳草香草を採集して宗廟に供えて春の祭を行う習俗がある

祁々（きき）―衆多の貌

(ロ) 日田市庄手の日隈天神社には五岳上人自書の幟があり、次の銘文が記されている。

「祠広峨々　倚山拗水　衆庶欣々　捧蘋献蘩

註　拗（よう）―ねじくる。おさえる。蘋（ひん）―浮草。藻。

② とべら―魔除けのまじないの木―(八)のドンド焼の項参照

③ よもぎ（艾・蒿・蓬・蕭）―よもぎ餅と薬草として灸のもぐさの材料となる。

④ すすき（芒・薄・尾花）―柴刺によく使用される。

⑤ 菖蒲（しょうぶ）―五月の端午の節句に、菖蒲屋根を葺き菖蒲湯を沸かす。由布山や福間岳の山上の池の菖蒲は雨乞の呪具として採取されてきた。（大分の雨乞）亀川の砂湯では石菖を敷き石を枕に臥した。（脇　蘭室全集四二三頁）

⑥ 神社境内の植物の効用の伝承

(イ) 大分県西国東郡真玉町臼野山畑の飯牟礼神社〔彦火々出見命〕の境内の茅（かや）を伐って甑にさして牛馬の安全を祈る。（染矢多喜男―日本の民俗大分）

(ロ) 宮崎県児湯郡川南町白鬚の白鬚神社〔牛馬神三柱〕に参拝して、境内の笹を取って踊り、牛馬にその笹を食べさせると牛馬の病気が治るといわれる。（神社名鑑）

(ハ) 滋賀県愛知郡愛知川町の旧県社豊満神社（旗神さん）〔八幡神〕の神林の竹を旗等に用いると軍（いくさ）に勝つとい

われ、源頼朝等の武将が同社の竹を請うて旗竿等に使った。

(ニ) 賀茂社の葵（あおい）祭

(ホ) 日田市北豆田塚原の八坂社の神木である杉の枝は、悪魔除けとして参拝者が持ち帰って門口にさすのが習わしとなっていた。（日田神社蒐集録）

註　杉は夏の蚊やり火によく使われた。

(ヘ) 杵築市（八坂）日野、天田の天田八幡の境内末社黒川社〔瀬織津彦命〕は、もと中野田の黒川にあった。その神域の大樫の神木は、その枝葉が七島藺や稲作の虫除（むしよけ）に霊験ありといわれ、近郷は勿論国東半島からの参拝も多く、技葉が取尽くされて遂に大木が枯れたという。（杵築市誌）

(ト) 有用樹木　はぜ（櫨）ろう臘（櫨）うるし（漆＝柒＝桼）→漆器の塗料

くぬぎ（栩＝椚＝様＝櫟）→椎茸原木・薪炭材

以上の外果樹その他多くの利用種があるが省略。

(三) 六国史にみえる罪・穢

柴さし神事は次のような罪・穢を祓うのが事の起りである。六国史には次のように分類されている。

① 死―死穢、死骸、陵墓、獣死（犬、牛、馬、狐等）

② 疾病―疾病、血、月事、傷、灸治

③ 出産―産傷胎、妊者、獣産（犬）

④ 災厄変異―災（穢火）、日蝕、鳥、虫、風雨、地震、霹靂（激しい雷）、妖怪、外来人

⑤ 犯罪―罪人、罪悪、近親婚、犯婚、獣姦

⑥ 嗜欲―肉、酒、五辛、音楽

⑦　仏教その他―仏寺、仏事、忌語、北辰

参考①　宇佐宮では現在も雞肉を避けている。社殿造営の際、大蛇が南百段を一夜にして造るから菱形池に棲ませよというのを、八幡神が雞となって夜明けを告げ、大蛇を退けたという伝説によるという。

参考②　宇佐宮は古くより神仏混淆で⑦の項は見られない。北辰も宇佐宮の地主神となっている。

参考③　宇佐陰陽師は是則氏で、僧陰陽師として祝と共に祓を行い、若宮で亀卜を行った。道教的要素である。

参考④　宇佐宮千度祓では、祝五百度、陰陽師五百度と記されたものあり。

㈥　緑化とフイトンチッド

大戦後の日本の山野は、戦時中の乱伐と放任とで荒廃し目を覆いたくなる程の惨状であった。国力が回復してくると今度は都市化、工業化、モーターリゼーションの波が全国を襲い、日本改造の余波が驚異的な勢で日本中を席捲した。その結果自然は荒廃し、公害の発生、廃棄物の山が我々の生活をおびやかすようになった。ようやくにして緑化（グリーン作戦）・清掃（クリーン作戦）事業が識者によって提唱され指導され、人々の関心や理解も高くなってきつつある昨今である。

これらの中から若干の印象的な事項を拾いあげてみた。

①　学校緑化・都市緑化―山口県宇部市では一本の樟や樫の成木は十五人に必要な酸素を供給するとし、人口十五万の宇部市に常緑樹一万本を計画的に植樹して成功した。また学校では緑化コンクールが行われている。

②　緑の工場―新日鉄大分工場は、公害征服と美化のため建設の当初から計画的にグリーン作戦を意欲的に展開し、今驚くべきグリーンベルトが工場をめぐって急速に成長し、全国の工場造成の生きたモデルとなっている。この樹種選定に当っては横浜国大の宮脇　昭博士の「ふるさとの鎮守の森こそその地方の理想的造林のモデルである」が見事に生かされている。

③　芝生―かつて筆者はヨーロッパ旅行中、西欧の各地で見事な芝生が長年月安定的に管理されているのを見て驚いた。ケンブリッジ大学やロンドンのハイドパークその他の、草一本ない芝生の見事さは到底日本ではお目にかかれないものであった

しかしこうした芝生の基盤は和辻哲郎先生の「風土」でみられるように、ヨーロッパの風土が温順で降水量も適当で、放任していても雑草雑木が生れない自然にあるからである。

日本のような熱帯降雨林的風土では、高温多湿の為に雑草雑木の侵入を防ぐことは不可能に近い。ヨーロッパの芝生をまねた校庭や堤防の芝生の造成は、結局雑草雑木に蹂躙されてしまうのがおちであると私は思う。

④　森林浴とフイトンチッド

日本では古来山岳仏教や山林抖擻（とそう）の修験道の山伏は、山や森林の中で自然を満喫しながら修業をし生活した。又寺々を巡るお遍路も同様に自然の中を旅してまわった。この山林の木々から発散される精気がこれらの人々の健康に好影響を与えたであろうと推測されている。

今やドイツ人のハンデルンク（山歩き）や、ソ連のトーキン教授の提唱したフイトンチッド（フイトンは森林、チツドは殺す）で、森林の新鮮な枝葉が発散する芳香性・揮発物質が、殺菌力があり人間の心身の自浄力を増進すること）が見直され評価されて流行語となり、自然休養林が設定され、「森林浴で命の洗濯」がもてはやされるようになっている事は喜ばしい。

結語

現在の神事でも神官による四方祓いや参列者の玉串奉奠で榊の枝が最も多く使用されている。

註　玉串とは榊の小枝に木棉（ゆふ）または垂手（しで）を着けたものである。

手向けの神に供える柴や芥神に捧げる塵（ちり）・芥（あくた）、ヒダル神へのまじないの飯粒、南島の邪気払いの柴差、宇佐神宮の柴差神事等を次々に検討してきたが、その根底に古代日本のアニミズムと御霊信仰の根強さが共通していると思えてならなかった。

忘れられ過去のものとなりつつあり、またはなってしまった民俗や行事に、古代の民俗を偲ぶ一助としてこの「柴さし考」の小稿を綴ったものである。

（[redacted]）